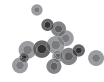




# この人に 聞く

「臨床血液」は会誌としての役割だけではなく、若手の医療従事者の教育ツールとして重要な役割を果たしている。「この人に聞く」では、血液学の発展に寄与した偉大な先生方に貴重な話を伺う。今回は第80回日本血液学会学術集會会長の松村到先生に語っていただいた。

進行役＝小松則夫  
順天堂大学医学部内科学血液学講座教授



## 第80回日本血液学会学術集會 を振り返って

**小松** 本日は第80回学術集會の会長を務められた近畿大学の松村教授をお招きしました。松村先生、学術集會の開催お疲れ様でした。本日は学会開催のご苦労や今回の学会のハイライト、それから先生ご自身についてもお話を伺いたいと思っております。よろしくお願いいたします。

**松村** 小松先生、本日はお招きいただきありがとうございます。第80回日本血液学会学術集會は、2018年10月12日(金)～14日(日)の3日間、大阪国際会議場にて開催させていただきました。過去最多の6,930人の先生方にご参加いただき、盛会のうちに幕を閉じることができました。これもひとえに会員の先生方、血液学に関わる企業の方々のサポートのおかげだと感謝しております。特に、プログラム企画委員長豊嶋先生、プログラム企画委員、査読委員の先生方には本当にお世話になりました。

**小松** 今回は第80回の記念集會ということで、特別な企画やアイデアはあったのですか。

**松村** 学術集會のテーマを何にしようか随分迷ったのですが、第80回記念集會であることから、最終的に“日本血液学会の進歩(Progress of the Japanese Society of Hematology)”としました。このテーマには、本学術集會を、先人が築いてこられた業績を引き継ぎ、今後さらに発展させるきっかけにし



松村到先生



大阪国際会議場のある中ノ島に掲示された学術集会のパナー



会長講演

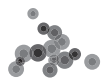


パネル展示：日本近代血液学の建設

たいとの思いが込められています。

**小松** 日本血液学会の歴史をパネル展示されていましたね。過去の業績や歴代会長の写真が展示され、私も含めてたくさんの参加者が見て、懐かしく感じました。

**松村** はい。血液学の偉人の業績をパネル展示するとともに、著書などの実物を展示しました。また、これまでの学術集会の歴代会長の写真をパネル展示させていただきました。それと、オープニングセレモニーの動画の中でも歴代会長の写真を紹介しました。



## プログラム内容について

**小松** 今回の学会のハイライトとして、会長企画のプログラムに

ついてお話しいただけますか。

**松村** 私は、若いころからシグナル伝達の基礎研究を続けており、それを母体として、臨床ではCMLを中心とする分子標的療法を専門としてきました。分子標的療法は、わが国では2001年のイマチニブ、リツキシマブに始まり、その後も、ボルテゾミブ、ダラツムマブなどの薬剤が続々と開発され、現在でもFLT3阻害薬やIDH1/2阻害薬の開発が進んでいます。それで、会長シンポジウムのテーマを“分子標的療法の最先端 (Cutting edge of molecular target therapy for hematologic malignancies)”として、MD AndersonセンターのDr. Cortes JEと一緒に座長をさせていただきました。また、会長講演のテーマは、“造血器悪性疾患における腫瘍性チロシンキナーゼの役割 (Roles of Oncogenic Tyrosine Kinases in Hematologic Malignancies)”として、AML, CMLに対するチロシンキナーゼ阻害薬の基礎と臨床について発表させていただきました。

**小松** 特別講演は大阪大学の坂口志文先生でしたね。坂口先生は制御性T細胞の発見者で、この数年ノーベル医学賞の候補に名前が挙がっておられますが、先生は坂口先生とご関係はあったのですか。

**松村** いいえ、坂口先生は私のメンターではありません。メンターと言えるのは会長講演の座長をさせていただいた金倉先生と平野先生です。私は留学しておらず海外にメンターがいないので、金倉先生に相談したところ、「坂口先生がいいだろう」ということで特別講演をお願いしました。この数年は免疫チェックポイント阻害薬をはじめとする抗腫瘍免疫が脚光を浴びているので、時期的にもちょうど良いと思いました。

**小松** 昨年のも木崎先生は、海外で活躍されている日本人研究者を



特別講演（坂口志文先生）

集めてシンポジウムを企画されましたが、今回は国内の若手研究者を中心としたシンポジウムを開催されましたね。

**松村** 今回は「日本血液学会の進歩」をテーマとしていましたので、日本国内でも世界に伍する研究ができるということを示したいと思いました。それで、「日本血液学会の輝ける若手研究者（Rising Stars in JSH）」というテーマで、国内で目覚ましい成果を上げている若手研究者にスポットライトを当てました。英語での質疑応答で十分に議論を深められるか心配していましたが、全く問題ありませんでした。

**小松** 若手研究者の英語が上手だというのは私も感じます。以前はそうでもなかったですが、この数年のシンポジウムやプレナリーセッションでは、プレゼンテーションだけでなく、英語での質疑応答も英語でしっかりできるようになりましたね。

**松村** 学術集会の英語化は、10年程前から抄録の英語化に始まり、少しずつ進められてきました。その成果は現れているようで、「若いヒトは英語が上手だなあ」と感じます。今年は、初めてすべてのシンポジウムを英語セッションとしましたが、学術集会の英語化がスムーズに進んでいるのを感じます。学術集会後のアンケートを読ませていただいても、現在のペースでの英語化は、会員の先生方に受け入れられているようです。

**小松** シンポジウムの発表内容もかなりレベルが高かったと感じました。欧米から招待した演者の何人もから日本血液学会の学術集会のレベルは、米国血液学会（ASH）並みだという評価を聞きました。

**松村** 確かにシンポジウムやプレナリーセッションのレベルは高くなっていますね。これらのセッションでの国内演者の発表を聞いていても、海外からの招待演者の発表と大差ありません。それと、今年気がついたのですが、海外からの招待演者が、自分が登壇するセッションだけでなく、ほかのセッションにも参

加し、積極的に質問していたのが印象的でした。

**小松** 国際化というと、欧州血液学会（EHA）とのコラボレーションが今年で10年目を迎えました。両学会のこれまでの交流を振り返る動画をEHAの会長講演、ジョイントシンポジウムの前に流されましたが、先生がご自身で動画を作られたというのは本当ですか。

**松村** そのとおりです。最後のところで医局員に少し手伝ってもらいましたが、自分で過去の写真を集めて、その中から写真を選んで動画にしました。音楽はQueenの「Born to Love You」と「Show Must Go On」です。「Show Must Go On」は昔から好きだったのですが、この楽曲には、日本血液学会が今後も進化していくという願いと、EHAとの関係を継続することへの思いを込めました。

**小松** 今年、Queenの「ボヘミアン・ラブソデイ」という映画が大ヒットしていますが、時期がぴったりでしたね。映画をみてQueenの楽曲にされたのですか。

**松村** これは偶然です。Queenの映画が公開されていることは知りませんでした。学術集会が終わってからそのことを教えられて映画を見に行きました。映画のエンディングで「Show Must Go On」が流されて、感慨深く学術集会を思い出しました。

**小松** それ以外のシンポジウムについても教えていただけますか。

**松村** 国際細胞療法学会議（International Society for Cellular Therapy：ISCT）とのジョイントシンポジウムを新しい企画として開催しました。今回のテーマは「がん免疫療法の新たな方向性（New direction of tumor immunotherapy）」で、日本、米国、オーストラリアの研究者が講演しました。造血器腫瘍領域では、分子標的療法、造血幹細胞移植があるため、免疫チェックポイント阻害薬などの抗腫瘍免疫療法への取り組みが



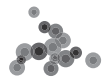
小松則夫先生



遅れていましたが、このシンポジウムを通じて、造血器腫瘍領域における抗腫瘍免疫療法の今後の発展性を認識してもらえたと思います。

**小松** 一般演題については如何ですか。

**松村** 今回、1,310 演題の応募をいただきました。このうち海外からの演題は 118 題でした。以前は、海外、特にアジア諸国からは演題を応募するけれど、実際には参加されないことが多かったと思います。しかし、この数年は実際に参加して発表し、ほかのセッションも聴講されている方が増えています。



## プログラム以外の企画について

**小松** 次に、プログラム以外の企画についてお話しいただけますか。さまざまな企画に先生独自の工夫や気遣いが感じ取れました。木崎先生のことを気合が入りすぎとおっしゃっていましたが、先生も随分気合が入っておられましたね。オープニングセレモニーは、三谷先生の学術集会から始まり、三谷先生は和太鼓、その次の木崎先生は吹奏楽の演奏でした。今年はどうのように企画されたのですか。

**松村** 今年は、和楽と洋楽をミックスした演奏をされる“びかむ”というユニットにお願いしました。オープニングの動画は前半の歴代会長の写真で日本血液学会の歴史を振り返っていただき、後半は大阪をアピールするものにしました。

**小松** 今年の学術集会では ASH のようにデイリーニュースを 3 日間配られましたね。大変ではなかったですか。

**松村** 事前に用意できる部分の原稿は準備しておきましたが、当日の発表内容が違っていたりして、かなりバタバタしました。



オープニングセレモニー（びかむの演奏）



デイリーニュースの配布

この作業はすべて医局員の田中先生、森田先生、頼先生が行ってくれました。

**小松** 前年度の木崎会長はコングレスバッグへの思い入れが強く、一澤帆布のコングレスバッグを使用されましたが、先生も随分苦労されたと聞いています。

**松村** いくら探しても一澤帆布に優るバッグは見つかりませんでした。悩んでいるときに、知り合いから“Dean & DeLuca”のバッグが女性に大人気と教えてもらい、これに決めました。しかし、5色揃えるのが大変で、ポルドーとネイビーのバッグはクリスマス限定物だったので、知り合いに頼んだり、自分で何軒も店舗を回って、日本中のバッグを買い占めました。このコングレスバッグも好評で、最終日には足りなくなるかもしれないと心配したほど、ほとんどの参加者に受け取っていただきました。今回初めてバッグに入れた Rollbahn の手帳とペンも好評でした。

**小松** 指定演題の演者や座長に配るお礼の品が、プリペイドカードではなく、学会のロゴの入ったチョコレートでしたね。

**松村** 今回、第 80 回用のロゴは作りませんでした。そのチョコレートの上に、大阪城を描いたものと、血液学会のロゴを入れたものの 2 個セットでお渡ししました。大阪城の絵はチョコレートに描けるものということで、知り合いと一緒に考えました。つまらないことですが、お礼にチョコレートを渡すというのは、これまでの学会にはなかった新しいコンセプトだと自負しています。

**小松** 最近の学術集会では、記念コンサートを開催していませんでしたが、今年は、記念コンサートを復活させられましたね。これには何か理由があったのですか。



座長へのお礼（マリベルのチョコレート）



記念コンサート（新妻聖子さん）

**松村** 昨年の日野皓正さんもそうでしたが、最近では会員懇親会の前にイベントが行われてきました。ただ、大阪国際会議場のメインホールは音楽のイベントに使われています。メインホールの音響設備がせっかく完備されているので、そちらで楽しんでいただこうと思ったからです。それと、市民公開講座を1日前にずらし、日本白血病基金や患者会の方々など一般の参加者にも一緒に楽しんでいただこうと思いました。それで、懇親会前ではなくメインホールでの記念コンサートという形式で実施しました。学会が華美になってきているというご意見もありますが、第80回の記念大会でしたのでご容赦いただけたらと思っています。

**小松** 記念コンサートに新妻聖子さんをお呼びされましたね。私もミュージカルが好きなので楽しませていただきました。選曲は先生ですか。

**松村** 私も趣味がミュージカル鑑賞ですので、ミュージカルの楽曲中心でもよかったのですが、今回は彼女の持ち歌の中から参加者の方が聞いたことのある歌を中心にリクエストさせていただきました。特に、「I love You」と「糸」は強くリクエストしました。

**小松** 振り返ってみて、あそこはこうしたらよかったとか、これは今後改善すべきだという反省点をお聞かせいただけますか。私が会長を務める来年の総会に活かしたいと思います。

**松村** 日本血液学会では学術集会が終了してから、会員の皆様からアンケートをとっています。過去のアンケート結果と比べても、プログラム内容については概ね満足いただけたようです。ただ、ポスター会場が狭かったというコメントを多数いただきました。私もポスター会場に足を運んでいましたが、移動に困るほどの人混みができていました。参加者、応募演題の増加に、会場の広さが合っていない感がありました。混雑を予想してポス

ターの間隔を前回より広げたのですが、足りませんでしたので、次回大阪で開催する際には、学会規模の拡大に応じた会場設営が課題となります。

**小松** 学術集会が終わって感じられたことはありますか。あるいは燃え尽きたとか。

**松村** 学術集会の会長は考えていた以上に重責でした。しかし、嬉しかったこともたくさんありました。医局のスタッフは常にサポートしてくれましたし、運営会社の方には本当にお世話になりました。特に、今回の学術集会は、これまで血液学会を運営したことのない会社をお願いしたのですが、彼ら、特にチーフディレクターの金子さんは、準備段階から当日運営まで見事にやり終えてくれました。学術集会を開催したことで、他人に感謝するという気持ちを何度も思い出すことができました。やはり、人間一人では生きていけないというのを実感しました。



## 若いころの研究の苦難

**小松** ここから先生ご自身のことを伺いたいと思います。先生は金倉先生のところにおられたので、私はずっと以前から先生のことを知っていますが、金倉先生のところで研究される前、どのような研究をされていたのですか。

**松村** 学位を取ったあと、大阪大学内のバイオメディカル教育センターの平野俊夫教授のところで研究する機会をいただきました。平野先生は岸本先生のもとで、IL-6をクローニングされ、ちょうど独立されたところでした。

**小松** 平野先生のところでは、どんな研究をされていたのですか。研究はうまくいきましたか。

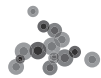
**松村** IL-6 のシグナルを伝達するチロシンキナーゼの同定です。HepG2 という肝臓がんの細胞株に発現するチロシンキナーゼを軒並み単離していき、アンチセンスで発現させて IL-6 のシグナルをブロックするかどうかを検討していました。しかし、全然うまくいきませんでした。その頃、私の指導教官であった中嶋弘一先生（現大阪市立大学教授）は、JAK ファミリーのチロシンキナーゼが IL-6 のシグナルを伝える可能性があるとおっしゃっていました。マウス JAK2 のクローニングまではしたのですが、抗体を作るに至らなかったのが失敗でした。その後、インターフェロンのシグナルを伝えるのが JAK ファミリーの Tyk2 であることが示され、その時点では手遅れでした。研究者として人生最大のチャンスを失ったと随分落ち込みました。

**小松** 平野先生の所で研究された後、金倉先生のもとでトロンボポエチンの研究をされていましたね。

**松村** 金倉先生のもとでの研究テーマは、造血細胞の増殖・分化をシグナル伝達、細胞周期制御の観点から明らかにすることでした。細胞株にシグナル伝達分子の優勢阻害型や、細胞周期制御分子を導入し、膨大な種類の株を培養しつつ、連日 10 枚以上のノザンプロットに明け暮れていました。今から思えばよくやっていたと思います。

**小松** 私もトロンボポエチンの研究をしていたので、先生とは学会とか研究会でよく同じセッションになりましたよね。

**松村** あの頃、小松先生がどんどん論文を書かれるので、小松先生が憎らしかったですね。それでも、研究会の後の飲み会では本当に楽しく一緒に過ごさせていただきました。先生に無理を言って、ご自身で作られた UT-7 という細胞株を供与していただいたことを今でも覚えています。



## 支えてくれた恩師と仲間

**小松** 金倉先生とは、今でも同じ大阪ですので、顔を合わせられることが多いと思いますが、金倉先生とはいつからのお付き合いですか。

**松村** 私が研修医になってからずっとです。大阪大学にいた頃は基礎研究から臨床まで、大学生活のすべてにおいてお世話になりました。金倉先生がおられなければ、今の私はありません



小松先生（左）と松村先生（右）

し、今でも多くの面でご指導・ご支援いただいています。金倉先生は今年で退官されますが、その退官記念誌に投稿したように、「悔しいけれど、「さすが金倉先生！」という思い出ばかり」です。まさに永遠に届かない目標ですね。

**小松** 会長講演の謝辞に、朝長先生、直江先生の写真も出しておられましたね。特別な関係があったのですか。

**松村** 私が日本血液学会で継続的に仕事をするきっかけをくださったのが、朝長先生です。朝長先生が教育企画委員会の委員長に指名して下さいました。直江先生は、新 TARGET の実行委員長に指名して下さりました。直江先生の印象は大好きというより、あこがれに近いですね。

**小松** 先生は副理事長として、理事長の赤司先生、もう一人の副理事長の三谷先生ともよく一緒におられますが、2人は先生にとってどんな存在ですか。

**松村** 三谷先生とは同い年で誕生日も近く、赤司先生は1つ年下です。3人で食事や飲みに行く機会が多く、本当に仲がよいですよ。先生や木崎先生にもかわいがっていただいています。この3人はまさに同世代です。私にとって、“絹ちゃん”と“浩ちゃん”という存在です。

**小松** 最後になりますが、日本血液学会の会員の先生にメッセージがあればどうぞお伝えください。

**松村** 第 80 回学術集会にご参加いただきました皆様に心からお礼申し上げます。ご不便やご迷惑をおかけしたことが多々あったかと思いますが、ご容赦のほどよろしくお願い申し上げます。皆様の今後の益々のご発展を祈念するとともに、小松先生が開催される第 81 回学術集会で再会できることを楽しみにしております。本当にありがとうございました。